記事紹介

4・28闘争特集

＝東京・大阪＝

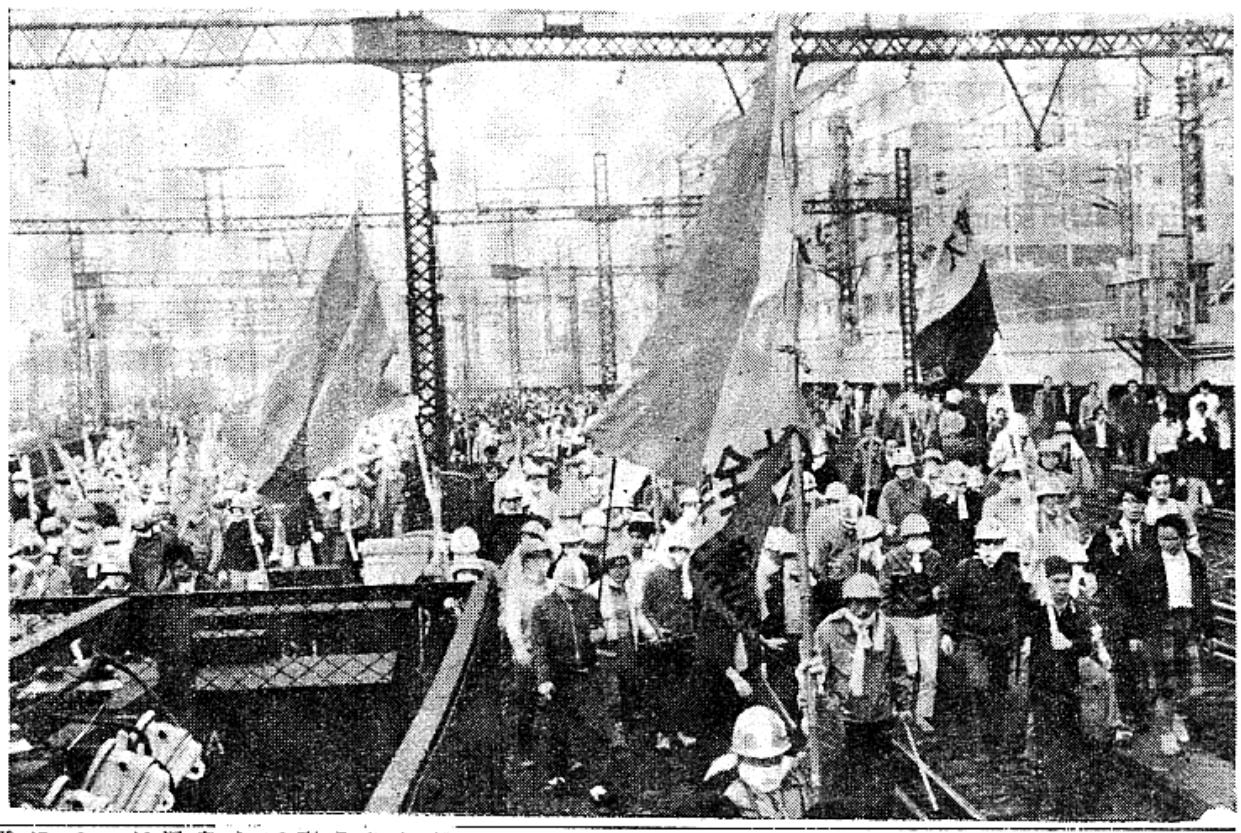
新左翼

1969年
5月15日
第28号
月3回5、15、25日発行
1部 15円
1カ月50円 半年300円
1カ年600円〒共

発行所
新左翼社
大阪市大淀区本庄川崎町
2－10 トミヤビル
電話（371）5304
振替口座 大阪 88555
昭和43年12月12日
第三種郵便物認可

4・28沖縄闘争 最大の爆発勝取る

都心でゲリラ戦 全学連・反戦が総決起



一九五二年のこの日に発効したサンフランシスコ条約によって、沖縄は、アメリカの施政下にくみ敷かれた。一九四五年四月、沖縄に上陸し、沖縄県民の悲惨な犠牲をもたらした米帝は、世界支配のなかんずく極東支配の戦略的基点として、沖縄を軍政下においた。偉大な中国人民の革命の成功と、朝鮮人民の抗戦に恐怖した米帝とそれに保護されて育った日帝は、その支配を合法的に補完するものとして、偽瞞的な単独講和、サンフランシスコ条約の締結と、安保条約による極東支配を確立した。この日、裏に戦う学生、青年労働者の偽瞞を許さぬ追求とラジカルな行動を、何よりも（国家権力よりも！）恐れる日共代々木と社会党の統一集会が、代々木公園で、翼下労働組合の大動員のもとに開かれる一方、神田、銀座、有楽町を中心とし、同時多発的に、全学連、反戦、べ平連によって、戦闘的闘争が展開された。（新橋にむけて行進する反戦・全学連）

二十八日午後三時、各派一斉に最後拳をもくろむ治安当局の裏をかいて、東京駅に結集した。

この部隊は、ゲバ棒で武装した中核派を中心とし、横浜国大らの行動をおこし、拠点校出発時に大弾圧をのがれた学生、反戦（約三千名）は、新橋駅より霞が関官庁街に向かい、数寄屋橋、銀座橋で機動隊と衝突、交番を焼打ちし都庁前で官憲の車三台、乗用車などに放火し、その地区一帯を「拠」した。

一方、神田学生街（明大、中大日大）の社学同系千五百人は、お茶の水駅前から、道路上にバリケードをつくり、カルチェラタン闘争を展開した。

これに呼応して、医科歯科大にいた造成部隊も闘争に参加し、激しく機動隊と闘った。

同じころ、社学同系の二百人は世田谷代沢町の首相私邸を、石、ビンなどを投げて襲った。

一方渋谷でも、中央集会に参加した反戦青年委とフロント系学生が、並木橋交差点付近で、機動隊と衝突し、それに群衆が加わって機動隊をはさみうちにした。

この日の闘争で特徴的なことは一〇・二一、東大闘争を上回る厳しい警備のために、霞が関官庁街に入れなかったが、夜になって、群衆をまきこんだゲリラ戦を展開し、山手、中央、常磐、横須賀、京浜、東北、東海道など、東京都の最重要の交通機関が数時間、完全にストップしたこと、しかもそれが、都下の各地域において同時多発的におこり、強固な警備体制をしいていた機動隊を分断させ、場所によっては、一時的に機動隊を孤立させたことである。

神奈川勢、東大全共闘および反帝学評、社学同の各派約二千人である。

午後六時三十分、新橋駅に向けて線路上をデモ行進し初めた学生は、新橋駅に結集した反戦青年委と べ平連の一部（約千五百名）と共に機動隊と激突した。

新橋駅前

各所で路上占拠・デモ 振り回される機動隊

学生と共に立上った市民

四月二八日、午後六時三〇分。沢山の石が散乱する新橋駅前は、学生集団に占拠されていた。車は学生にUターンさせられていた。

「天下の公道をなぜ通さないのだ」と学生と口論する人。「こんな時手なまねをさせて置くことはない。皆であいつらを追い出そう」と叫ぶ人。だが学生よりも圧倒的に多い群衆は、ただ駅って見ているだけである。マイカー族がふえたとはいえ、まだまだ車は大衆のものとはなっていない。車の通行がストップしても関係ない人が多いのだろう。

花火の音に似た催涙弾の音が近づき、左右に群衆、前方繁地方面にヘルメット学生が逃げる。「危険ですから一般の方は退って下さい」スピーカーの声と同時にバラと機動隊が走ってくる。「キャーッ、機動隊はこっちに来ないでェ」「機動隊が来るから危ないんだ」

学生を追って機動隊が前進すると、群衆が後からゾロゾロとついていく。学生がいなくなっても交通渋滞は続く。そのうちに群衆のなかから機動隊に向って「カエレ カエレ」のシュプレヒコールが沿びせられ、石を投げる者も出てくる。前に学生、後に群衆と前後を挟まれた機動隊は、後方守備のため、一部を残して学生を追わなければならなくなった。

約五十人の機動隊がすすめば、群衆はゾロゾロついて行き、止まれば「カエレ・カエレ」のシュプレヒコール。

「何だって付いてくるんだ」と威嚇すれば「税金ドロボー」「暴力団」の野次があびせられる。次第に西銀座の方に後退する機動隊は、途中で非武装の群衆に向って、催涙弾を二、四発発砲した。発砲すれば止ってもまた追いかける群衆。遂に機動隊は駆け出した。ワーッと上がる喚声。

なおも群衆は機動隊の駆け去った方向をゾロゾロ歩いていく。群衆の半数以上は学生のようだった。ノンセクトかあるいはセクトのシンパで、何らかの事情でセクトの行動に参加できず、せめて野次馬としてでも参加したいという者が多かったのではないかと思う。彼ら学生の間から発生したのであろう、ゾロゾロ歩きの中から「安保・粉砕」のシュプレヒコールが飛び出し、たちまち大きくなった。このヘルメット姿のひとつ

西銀座

日比谷交差点

もない、凄もない奇妙なデモ隊に通行人はけげんそうな顔をして見守り、一緒に歩き出す。シュプレヒコールを叫びて「ソレ、学生デモが来た」と飛び出してくる野次馬も音をかしげ、そのうちの何人かが参加する。

「安保・粉砕」「沖縄・返せ」のシュプレヒコールと、道路いっぱいの無統制の行進。機動隊を追って西銀座から晴海通りを歩いてきた群衆は、日比谷交差点で右側に、五百人以上の機動隊が待機しているのを見た。シュプレヒコールが、突如「カエレ・カエレ」にかわる。

日比谷通りと晴海通りの交差点は、霞が関にも、銀座にも直ちに出撃できる場所であり遊撃隊としてここに期待していたのであろう。機動隊は、急に現われた千人近くの群衆に明らかにとまどいを見せた。群衆の中のヘルメット姿といえば四、五人の報道関係者だけである。

それまで交差点の中央で交通規制を行なっていた約十人の巡査は立退かざるを得ず、日比谷交差点は群衆の占拠するところとなり、交通は完全に止められた。

「安保・粉砕」「沖縄・返せ」「官憲・帰れ」のシュプレヒコールの中から約百人が飛び出し、ジグザグデモ、フランスデモが始まる。それは不慣れな見まう見まねの感をまぬがれなかった。

放って置けなくなったのだろう機動隊は歩道の一角に突進した。「さあ行け行け」「行けったって機動隊に囲まれちゃあ行くところがないじゃないか」「どこでもいいから行け」「そんなに突くなよ」

「機動隊が女の子を突き飛ばしたぞ！」

「俺たちは何も武器を持っていないんだから、なぐったら違法だぞ」

この攻撃で群衆はちょっと後退したが、機動隊が元の位置にもどるとまた「帰れ・帰れ」「安保・粉砕」「沖縄・返せ」が始まる。

武装学生との喧嘩には慣れている機動隊も、非武装の大衆、指導者の無い集団の扱いには困惑した。群衆のまわりにこれを見物する野次馬が次第にふえ、反逆的群衆と野次馬的群衆との区別が全くつかない。

「無届デモ、無届集会は違法ですから直ちに解散して下さい。皆さんがいつまでも立ち去らなければ、警察は実力を行使します」

空しく響くスピーカーの声に人びとは、自分たちの行動が無届けのデモ・集会であり、いつも弱き市民である彼らが、始めて国家権力にさからったという事に気付き、シュプレヒコールが一段と熱をおびる。

職人風の男が何か叫ぶと、人びとが、「集会だ、集会だ」といって彼を囲む。彼はテレ臭そうに黙ってしまう。アジ演説を行なう絶好の機会だったが、誰も自信のあるものはいない。

機動隊は放水であっまった人びとを散らそうとしたが、効果がなく、ジグザグデモが再び繰り返された後、「沖縄を解放するぞ！」「安保を粉砕するぞ！」「暴力団機動隊は帰れ！」「日比谷を解放したぞ！」などのシュプレヒコール。フランスデモをしながらの「インターナショナル」合唱。

九時ごろ「今から歩道の整理を行ないます」とのスピーカーの後三分の二の機動隊が銀座の方に向った。あとから考えれば、このころ学生集団が銀座で機動隊とぶつかっていたのであろう。この移動に群衆の半数は機動隊の後をついていってしまい、シュプレヒコールも次第に弱くなり、遂にやんでしまった。その後なお交差点中央に居り込んだ二十人ほどの人たちもだんだんその数を減らし、九時半ごろには交通巡査が再び交通整理を始めた。

自然発生的に結合した大衆は、自然消滅的に無散していった。銀座で華やかな戦闘が行なわれていたころ、日比谷で、新聞にも報道されない比較的地味な路上占拠を約二時間にわたって行なった人たち。この人たちが全学連の行動に刺激されたとか、一部学生に煽動されたとか見るのは誤りである。

安保体制反対の意識はあっても学生の実力闘争まではいけない大衆、機能的組織を持たない大衆は群衆、野次馬とならざるを得ないいと見て途中でやめる。

ジグザグデモが再び繰り返されたのである。（東京支局 Q）

破防法粉砕・大学緊急立法粉砕・沖縄奪還

5・21革共同大政治集会

五月二十一日（水）午後六時
大阪中之島中央公会堂大ホール
特別講演 羽仁五郎「破防法適用と日本帝国主義の危機」
主催 革命的共産主義者同盟（中核派）

おわび

五月五日号は、編集・印刷体制の不備により休刊のやむなきに至りました。

四・二八をはじめ、激しい闘争のさなかに、その要求に応えられない事態を生じたことを深くおわびいたします。

新左翼社

沖縄の代表も憤激

矛盾に満ちた中央集会

前日まで「反戦青年委」の参加問題でもめぬき、沖縄県祖国復帰協議会（復帰協）の懸命なオルグの結果動員された中央大会は、代々木公園において、十万人の労働者が参加した。公園の木々が煙り霞くなった青空に、その影を落とすところ、林立する各労組旗、赤旗にうずめ尽された代々木公園は中央演壇前に位置した復帰協の青幟を中心に、熱気につつまれた。このような、もりあがりと熱気は九年前のあの安保闘争以来のものである。

復帰協の人びとは、全員「沖縄を返せ」の赤地に白く抜いたはちまきをしめていた。テレビカメラのライトが、大会の熱気に目にやけた明るい笑顔を見せる復帰協の女性を照らす。その顔には、確信に満ちた美しさがあった。しかし、そのすぐ隣の四〇位の全電労の労働者は、刻々と東京駅の、新橋の学生たちの闘争を知らせるトランジスターラジオに耳を傾けていた。ライトは、その顔を映さなかったが、その眼は、鋭く輝いていた。沖縄連、沖実委、復帰協の三者主催によって開かれた中央大会は多きな黒い〝かげり〟を秘めていた。

六時すぎ開催された大会は、議長団選出後、復帰協代表桃原氏等の決意表明、沖縄返還要求国民大行進を貫徹した沖縄連及沖実委の各代表の報告、日米両政府に対する抗議決議を、万雷の拍手のうちに採択し、日米反動勢力の野望をうちくだき、安保条約廃棄、沖縄即時、無条件、全面返還をかちとるため、闘いぬくことを宣言、七時半過ぎ、デモ行進に入った。

代々木公園より恵比寿駅前広場に至るAコースのデモ隊は、復帰協を先頭とする沖縄連、地評の労働組合の人びとである。一〇列横隊になったデモ隊は、フランスデモから激しいジグザグデモに、そして再びフランスデモと、生き生きとした、熱気に満ちたデモを繰り広げた。沿道の勤め帰りの人びとや、商店の人たちから、さかんな拍手と声援をうけた。およそ、一時間半後「恵比寿駅前で流れ解散」というデモ指揮者のスピーカーにもかかわらず、復帰協の人びとを中心に総括集会が持たれた。続々とつめかける各労組の最後に各地区反戦のヘルメットや、高校生の部隊が、駅前広場に登場すると、復帰協の人たちは、全員拍手でこれを迎えた。

社会党のデモ指揮車が帰った九時すぎ、駅前広場は、各反戦に結集する二千余名の集会に変った。挨拶に立った復帰協の大田氏は、闘う青年労働者・学生を排除した日共代々木を糾弾し「今日ここにおいて、初めて沖縄と本土の運動が一体となった。沖縄の解放のその日まで、共に闘うことを誓う」と挨拶し、熱烈な拍手を受けた。すでに国電はストップし、銀冶橋において、新橋において、丸の内において、学生による「都市ゲリラ」戦が展開されている時であった。

九時すぎ、反戦青年委二千余名によるデモが、恵比寿駅前より、渋谷駅に向けて開始された。激しいジグザグデモを繰りかえし、並木橋交差点前で、機動隊とにらみあった。デモ隊と沿道に集まった群衆の「ポリ公帰れ」のシュプレヒコールが繰りかえされること数分後、機動隊指揮者の「かかれ！」の合図と共に、デモ隊はおよそ三百名の機動隊の無禁な弾圧を受けた。催涙ガスが大きな音を立てつぎつぎとデモ隊めがけて撃ちこまれ、周囲は、目も開けられないほどガスが充満し、乱闘の場に一変した。周囲の群集は、デモ隊を追う機動隊の背後に、追まり、弾圧する機動隊は、退路を断たれた状態になり、狼狽した機動隊は、群衆にまで、無差別に催涙ガス筒を発砲し、都心警備に主力を注いだ権力は、完全に虚をつかれた形になった。

この中央大会において、持記すべき点は、以下の諸点である。

①安保以来の大規模な盛りあがりを獲得し全国で十四万以上の人びとが、行動を起こしたこと。

②しかし、その統一集会は、沖縄復帰協の人びとの強力なオルグによる結果であり、内実において多くの矛盾を内包したまま、場所的に一致したにすぎないこと。

③それゆえ、闘う青年労働者、学生の部隊を結果として完全に切り離し、真に権力に対する強い圧力となるためには、非常に不十分であったこと。

④デモ後の恵比寿駅前集合において、全電労の中年の労働者が「本当に闘っている学生や青年たちを切ってしまう本土政党のやり方がくやしくてしようがない」といきどおりをぶちまけていた。この素朴な日焼けした労働者の声は、すぐれて、二・四ゼネストを回避し闘争の持つ本質的意義を隠蔽した社共議会主義政党および本土労働組合ボスに対する、真に闘う沖縄県の人々の痛烈な批判であること。

⑤学生の都市ゲリラ戦が、この中央大会と完全に断たれて行なわれたことに対する社共の責任は、大会の盛りあがりと沖縄闘争の七〇年を前にする反安保闘争において占める重要な環であるがゆえに犯罪的といわねばならないこと。

中央大会は、確かに十万以上の大衆を動員し大きな成果を収めたが、前記のように内部にある大きな矛盾を隠蔽したものであり、なかんづく学生、反戦青年委の真に戦闘的な部隊とを切り離した上での中央統一集会であるがゆえに、大きな欠落した虚空を持つものである。すぐれて真の沖縄闘争は、四・二八以後の七十年に向けての闘争にかかっているといわねばならない。（神奈川労研　葉山）

破防法弾圧に抗議

革共同政治局が声明

四・二八闘争の大爆発を恐れた佐藤政府は、悪名高い破壊活動防止法をふりかざし、二十七日に革命的共産主義者同盟（中核派）の本多延嘉書記長を、二十八日には東京地区反戦の藤原慶久世話人を逮捕した。二十七日、同政治局は本多書記長逮捕に対して要旨次のような抗議声明を発表した。

一、革命的共産主義者同盟本多延嘉書記長に対する破防法適反にもとづく国家権力の不当逮捕は、四・二八沖縄奪還大闘争の空前の大爆発が必至であることに対する国家権力の恐怖にみちたかつて前例をみない予防拘禁的な政治的事前弾圧である。敵権力がかかる不当不法な弾圧行為にでた以上、われわれは明日の四・二八沖縄奪還大闘争においていかなる行動の自由をとる権利をも与えられたことはここに明白である。われわれはかかる敵権力の弾圧に対して、いささかも屈服することなく、四・二八沖縄奪還大闘争を予定どおり首都武装制圧・首相官邸占拠として、全学連、反戦、高校生、市民十万の力で断固実現する決意であり、すでに戦闘態勢は万全である。

一、本多延嘉書記長不当逮捕にひきつづいて二十七日午後九時から約二時間にわたって前進社に対して行なわれた警視庁公安部の強制捜索は、きわめて恣意的な態度であり、多くの点で前例のない違法行為を含んでいるものであった。かかる敵権力の弾圧は、四・二八沖縄奪還大闘争の空前の大爆発が必至であることに対する恐怖と焦燥のあらわれであり、明日の闘いを前にしてわれわれの闘いが、すでに彼らに甚大な打撃を与えている証左以外のなにものでもない。

一、敵権力は、今後も破防法適用をとおして、わが革命的共産主義者同盟を先頭とする日本労働者階級人民の七〇年闘争への高まりに対して、さまざまな弾圧と圧迫を加えてくるであろう。だがわれわれは、これを実力ではねかえし四・二八沖縄奪還大闘争の大爆発によって七〇年闘争への高揚闘争に突入し、これをもって敵権力への回答とするであろう。

70年闘争と統一戦線

東京　西川　和男

とうろん

七〇年代闘争の〝沖縄闘争〟

いうまでもなく、七〇年安保闘争は、社共議会主義政党のいうような、条約破棄（廃棄）闘争ではない。米帝の世界支配を補完し、日帝の海外侵略の背骨となっている安保体制に対する闘争である。

国内において、徹底した合理化政策と組合懐柔によって、労働において摘取されるばかりでなく、思想的にも、まったく統制されている労働者階級を想定しているのは米帝に従属しつつ、国内における労働運動、革新運動を弾圧、懐柔し、体制内に包含しつつ、経済的に海外に進出せんとしている日帝であり、それを保証しているのが安保体制である。

社共の、闘う青年と学生を分断し、支配を合理的、合法的に実施するための機関になりさがっている国会で七〇年を闘おうとする政策は、人民の眼を高揚の本質よりそらし、優少化し、幻想を与える何ものでもない。

沖縄闘争は、二・四ゼネストの社共および総評の裏切りによってめざめ、自覚された復帰協の内部において指摘されたように「沖縄の祖国復帰」の闘争ではなく、どのような状態の祖国に復帰するかが問題であり、沖縄の軍政統治と一体である（相互に補完し合っているが故に）安保体制に対する闘いである。

沖縄闘争を頂点とする全国基地闘争は、反戦闘争であると同時に反安保闘争である。

社共の議会内闘争、労組の動員合戦によるキャンペーン闘争は、戦術的な誤りであることのみならず戦略的にも重大な誤りである。

沖縄闘争は、反戦反安保闘争の最も重要な拠点であり、沖縄闘争を戦略的に闘うなかより、反安保統一行動の、統一戦線の結成が指向されねばならない。

統一戦線めざす　反安保統一行動を

四・二八沖縄闘争において、全学連のラジカルな行動に、反戦青年委の労働者および、一部ではあえべ平連が参加し、共闘がなされたこと、および、社共の野合的な結合と分断政策が社会党内部において批判され、ラジカリズムの動向が見えてきたことは注目に価いする。

しかも、この日の闘争に見られるように、各セクトが、その戦術が必ずしも正しいものではなかったとしても、統一行動、同時行動が持てたことは、画期的なことである。

この統一行動が行なわれた前提として、二月の五派声明、一月の全国労働運動左翼活動者会議、神奈川における安保共闘会議など、事前の連絡会議が持たれ、運動論的には「四・二〇」「四・二四」「四・二六」および「四・二七」の全国各地における四・二八闘争に向けての闘争の積み上げがあった。

このことは、戦闘的に闘う部隊の統一戦線というものが、どのようにして結成されるかということの示唆を与えるものでなかろうか。

すなわち戦闘的な統一戦線の形成というのは、単に街頭においてラジカルな統一行動をとるということだけではなく、その内実において、どのように戦闘性が位置づけられ、補完されるかという展望をも必要とするのである。

こんごの課題

四・二八沖縄闘争は、恵比寿駅前の反戦集会における復帰協の代表者の言葉にたん的に表わされたように「沖縄闘争は、四・二八によって初めて本土の戦闘的な部隊と沖縄における戦闘的部隊が同じ地平に立って統一行動を持ったであり、沖縄闘争は新らしい段階の第一歩を踏み出した」のである。

われわれの今後の課題は次の諸点が考えられる。

a　現地沖縄闘争と本土における闘争の交流をどのように行なっていくか。

二・四ゼネストの時、社共の裏切り行為により、何もとりくめなかった本土労働者は、この分断政策を、どのように止揚するか検討を迫まられている。

学生、反戦青年委の闘争の大衆動とを有機的に結びつけ、補完する部割を発揮できるものと思われる。四・二八闘争に見られた戦闘的な行動も、単にそれだけで終るなら、強い大きな意味を有するものとなりえない。

われわれに問われた運動は、戦闘的な部隊と、それを補完し、労働者の革命的存在意義を発揮する場である各生産点において、運動を展開しうるような運動体の結成と実践が問われているのでなかろうか。

（労働者　二十八才）

その視野は、沖縄闘争を沖縄闘争として闘うのではなく、労働者階級の体制内化された存在を徹底的に自己批判するなかより内側から切り崩し、七〇年安保体制闘争の重要な一環として、沖縄闘争を闘うことと思われる。

b　社共の分断工作と野合をどのように止揚し、戦闘的部隊の統一戦線を構築していくか。

統一戦線は闘うなかより結成されることは、もちろんではあるがわれわれは、民同路線にとっぷりつかり、なれあいのボス交を行なっている総評、大単産労組幹部は別として、今春闘に見られたような、下部の突きあげと、街頭において、ラジカルな運動ができにくい中小企業労働者の潜在的な戦闘性を、社会統治機構上にしめる位置の重要性とともに注目せねばならない。

学生、反戦青年委の街頭闘争が反安保闘争の一環であり、日本における社会変革、人民の解放を意図するものであるならば、運動がラジカルな部隊と、それを補完する地域的、産別的な新たな労働運動が展開されることが必要なのではないか。

その萌芽的な形態は、電通労研大闘争においていかなる行動の自由をとる権利をも与えられたことはここに明白である。われわれは学生と反戦青年委の街頭闘争が反安保闘争の一環であり、日本における社会変革、人民の解放を意図するものであるならば、運動がラジカルな部隊と、それを補完する地域的、産別的な新たな労働運動が展開されることが必要なのではないか。

その萌芽的な形態は、電通労研大闘争において、NHK長崎支部において、神奈川労研において生まれている。

c　七〇年安保闘争の今後の行動とを有機的に結びつけ、補完する部割を発揮できるものと思われる。四・二八闘争に見られた戦闘的な行動も、単にそれだけで終るなら、強い大きな意味を有するものとなりえない。

われわれに問われた運動は、戦闘的な部隊と、それを補完し、労働者の革命的存在意義を発揮する場である各生産点において、運動を展開しうるような運動体の結成と実践が問われているのでなかろうか。

（労働者　二十八才）

全世界の解放闘争と連帯

兵庫　明石反戦が結成宣言

近年の国内・国外の階級闘争の激化、わけても一・一八一・一九東大闘争を契機に急速に発展してきた学園闘争の激化は、明石の地に散在していたわれわれを刺激し、その結果われわれは自らの意志によって団結し、共に闘い得る組織を結成すべく明石反戦委員会準備会を発足させた。

われわれは準備会の段階において三・二三軍事基地撤去の反戦統一行動に参加し、四月八日には動力車青年部と共催で明石市民ホールにて、国家権力の妨害をのりこえて「三里塚の夏」を上映してきた。

だがしかし、われわれは準備会を明石反戦委員会として正式かつ早急に成立させるとの必要性を痛感し、本日四月十八日をもって明石反戦委員会を結成することをここに宣言する。

明石反戦委員会は既成の組織のオルグ活動によって成立したものではなく、あくまで緊迫した情勢の中で自然発生したものであり、現段階では一応セクト主義は度外視されて結束している。セクト主義は今後の闘争の過程において当然台頭し、表面化してくるであろうが、われわれは明石反戦結成の前提としてセクト主義はすべての闘う人民を結集すること、また統一の障害となり、それがセクト主義の欠陥であるとの一致した見解のもとに、セクト主義の台頭表面化を極力ふせぎ、広範な人民の階級的自覚を圧殺し、革新勢力を分断、麻痺させ、あまつさえ革新政党を体制内化させることに成功し、中でも日共＝民青は公然と闘う学生、労働者を反トロキャンペーンをもって非難・中傷し、暴力をもってその闘争を破壊し、自らその反革命の正体を暴露した。

われわれはもはや議会主義的理想では、国内外の帝国主義者の陰謀並びに現実の侵略を阻止し得ないことを認識し自ら実力闘争を展開することによってのみ、始めて可能であることを確信し、ベトナムを始めとする全世界の帝国主義の侵略戦争に反対し、日本人民を極東侵略にまきこむ日米軍事同盟「安保条約」を粉砕し、沖縄人民の闘争を支援し、すべての軍事基地を撤去させ、特に明石反戦として地理的に淡路空港設置反対を淡路の地元民と連帯して闘い、全世界の人民解放、民族解放闘争・反帝国主義闘争を支援し、全人類の解放を目指し「職場から街頭へ、そして再び職場へ」と反帝国主義侵略戦争の行動を展開し、すべての帝国主義者の陰謀並びに現実の反動行為を糾弾し、断固粉砕することを誓う。

四月十八日

御堂筋を三万の大デモ

〝反戦ガンバレ〟

4・28 労組から拍手と激励

四月二十八日、安保粉砕・沖縄奪還の闘いが全国でくりひろげられたが、大阪でも大手前公園で三万人の集会のあと、御堂筋デモをおこなった。例年ならば沖縄デーは、沖縄行進などのお祭りムードで、日共や総評右翼幹部らがあつまってお茶をニゴシて終っていたのに、今年は安保粉砕の闘いとして、また沖縄闘争勝利をめざし、七十年安保闘争そのものの開始をつげる闘いとして、米日帝国主義への痛打となって、きわめて戦闘的に展開された。

4.28大阪御堂筋を行くデモ隊

【K反戦通信員発】大阪での闘いの特徴をあげると

一、反戦青年委の主力部隊が東京の闘いに参加していたのにかかわらず、多くの職場から新しい若々しい人びとが反戦の隊伍にくわわり、そして始めて参加したらしい若い女子労働者が「今日は闘う部隊だからアマエてたらあかんで」と激励される光景がみられた。

一、白・赤・緑・青・黒・銀など色とりどりのヘルメットがひとつの部隊として、反戦の隊伍を組織した。全学連の部隊も、いつものように、セクト別の編成でなく、各学園の闘争委員会単位になっていた。

一、サラリーマン反戦が始めてデモの隊列にくわわった。オフィスの女子労働者が、とまどった気はずかしさと、反戦の隊列にくわわった誇らしさのいりまじった笑顔で、参加よびかけのビラを配っていた。

一、いつもなら春闘がおわったあとの四・二八のデモは、メーデー前もあってショボくなるのだが今年は公労協をはじめ多くの組合が未解決のせいもあって、労働組合の動員が非常に多く、そのなかで反戦のメンバーが先頭にたってデモを指揮している組合がかなりあった。

一、御堂筋の入口である本町四丁目交差点で、警察はデモの隊列を機敏にみわけて対処していた。労組の隊列がくると機動隊をひかせ、反戦・全学連・べ平連がくると、両側をはさむ。実にあざやかな対処ぶりだった。今回のデモの隊列は、先頭に民間のおとなしい組合をたて、まんなかに全学連・反戦、うしろに元気のいい公労協と、戦闘部隊の分断としかとりようのない編成だった。それに即応した警察のあざやかな対応。中央道にでたデモ隊に対する労組幹部のきびしい規制。その光景は警察と総評との事前の打合せを想定させるに十分だった。

以上のような情勢のなかでわれわれの隊列もデモにうつった。

大手前公園から本町四丁目交差点までいく途中で、われわれの部隊は、道路いっぱいに広がり、フランスデモ、カケ足デモをやり、労組の隊列からは「反戦ガンバレ」のかけ声と拍手でむかえられた。

本町四丁目交差点で機動隊と遭遇するや、すぐ隊列をくみなおしスクラムを固くし、腰をかがめて戦闘体制に入った。そして機動隊のタテとコン棒の林のなかを突破した。

本町四丁目で戦闘体制をくんでいると労組の右翼幹部たちは「私たちは挑発にのらないよう、整然たるデモを行ないます」とマイクで叫び、労働者の闘いをおさえにかかっていたが、「この腰抜け野郎」と労働者の反発をくらっていた。

あげくは組合のダラ幹をおしのけ、全運、大阪市職などの労働者は、職場反戦の部隊を先頭にフランスデモをおこない、本町交差点では、機動隊のはげしい弾圧を突破してジグザグで闘った。

このようにして、学生を先頭に反戦の隊伍と、労組の戦闘的労働者が統一して行動したデモとして四・二八のデモが警察機動隊を圧倒したことは、参加したわれわれにとって印象的だった。

私の発言

去る四月二十四日の大手私鉄二十四時間ストライキが持つ性格と、それが階級闘争全体に与えた影響について考えて見たいと思います。

当日の夕刊には、各ブル新、その他の全マスコミはこぞって徹底的にボロカスにくさしている。

「公共性を無視した！」

「バカの一つ覚え！」

「現実置去り！」

等々、あらんかぎりの罵倒ぶりである。

私自身二十四日は朝からぜんぜん仕事にならなかった。いつもなら三〇分で走っていたコースも、この日は二時間以上かかっている。でもちっとも腹が立たなかった。むしろ胸がすっとしたくらいである。

ストは必至といいながら、翌日の新聞には、必ず中止になりましたというのにはもうあきあきしていたから。

街の真ん中を通っている京阪の線路上を買物カゴを下げて、ものめづらしそうに歩いている奥さん連中や、いい遊び場を見つけて、はしゃいでいる子供たちを見た時、一つの日常性からの解放めいた感じがしないでもなかった。

毎日なんの変りもなく道路を流れていた車も、この日は腹かけ同様、学校、会社は開店休業に等しく、マイホームから職場までのリズムは、完全にたち切られた。およそ、時速五〇キロの高速道路なんてきいたことがない。

バトカーも、救急車も、どうやらサイレンを鳴らすのをあきらめたらしい。

全ての法と秩序は有名無実と化し、全くどうにもならないというのが当っていたようだ。

高度生長した資本主義の、とりわけ都市の体制の質的脆さが、四月二十四日に証明されたのである。

この上、電気、ガス、水道とかさなったら、その結果は誰の目にも明らかである。

私たちは、あらためて自信を持って全国ゼネストを準備しなければならない。

頭のかたいインテリや、ブル新は社会の反感をかうといっているが、そのとうりだと思う。しかし君たちのいう社会をわれわれの社会とは、だいぶちがうようだね。

社会の同情があれば、労働者階級は、強くなるであろうか？そんなことをいうのは、日共（代々木）か、社民諸君ぐらいであろう。労働者階級が徹底的に強いときこそ、広範な人民大衆の支持がある。

一部の人のなかには、今回の私鉄ストライキなど全々問題にならないという意見がある。これらの人をよく見るとあまり働きもしないで、多少家に金があるか、あるいは全くないか、いづれにしても自由主義的思想がその根底にある。

彼らは時々、政治闘争に参加し、これで自己否定したと思っている。彼らの発想は思いつきで運動を進めようとし、なる程自己否定もするが、それはほんの年に十数回で、残りは全部自己肯定である。このような思想の持主はたいてい、大衆がバカにみえてしかたがないのだ。

人の悪口をいうのはこれくらいにして、ストライキの件にはいろう。

私鉄のストライキが、たとえ経済的要求のみの闘争であっても、運動に新しい、大きな刺激を与えたことはたしかである。

労働者はなにも金額のみが問題であのようなストライキを行ったのではないと思う つまりその交渉のなかにふくまれている資本家の態度の質的変化が問題なのである。

団交は一貫して右よりの組合幹部ですらだまって引き下がれないほど、経営者は強気であり、日本の資本主義は、世界のトップをゆくほどの生産力をもちながら、労働者に対しては強気というより、バカ者扱いにした回答であったのだ。

また盛り上がった学生運動や反戦青年委員会の果した役割が、ここにも浸とうしつつあるといえる。私鉄労働者の若い人たちの、下からの突上げが多くあったことはブル新でも認めている。

物価の上昇、公害、通勤ラッシュへの腹立たしさ、体制不信、その他国内外の最近の激変が、いっそう彼らに自主的にストライキの決意をせまったのだ。

その後、四・二八闘争、メーデーと闘う中で、問題点が明らかになってきた。

四・二八のごとき政治闘争は、全労働者の先進的階級としての行動であり、その内にある政治思想は、いまや全人民的性格をもっている。これはまた、基本的な、もっとも根深い諸条件を指摘している。

一方、ほとんどの労働者は、経済要求なしには、全労働者の全般的進歩を考えにくい。（逆に経済的要求だけが階級闘争を進めるということは、まちがいであるが）

そこから運動への自己壊性、不屈さ、戦闘性を政治的に高めることができる。

以上のような政治闘争の意義と、職場の経済的であってもストライキとの結びつきが、思わぬ成果をうみだすばかりか、この両者の結びつきなしで、大衆運動を実現することはできないと思う。

それ故、四・二八と私鉄ストライキは決して別々のものであるととらえず、その結びつきをわれわれが深めて行かなければならないと痛感した。

私鉄ストに思う

門真反戦　N　生

さし入れ10ケ条

あなたの決断を

せめて週に一度でも

1

現在、一〇・二一、一一・七、東大闘争で、数百名が拘置所や刑務所につながれています。

差し入れ接見は、獄中にいるかれらの、外の世界との唯一の交通であり、激励なのです。なんというても孤独な闘い――そして中には五カ月も獄中につながれたままの人もいるのです。

全共闘や各セクトの救対は、必死に差し入れ活動をしていますが五百名にものぼる人々への差し入れ活動は容易ではありません。各地で市民による差し入れへの援助を開始しようではありませんか。せめて一週間に一度でも、獄中の仲間に差し入れ接見を！

以上の人々は、単帽の東京拘置所、小菅の拘置所、府中刑務所などに拘置されています。この人々への差し入れ、接見の方法については、救援連絡センター（東京都港区西新橋二丁目六一八浅野ビル電話五九一―一三〇一・一三〇二）に問い合わせて下さい。

2

闘争の直後は、逮捕者は、各区の警察署に数名から十余名が留置されます。あなたの家の近くの警察署にも何人かの逮捕者たちが、血涙波にぬれ、負傷したまま、留置され、留置場のなれない食事に苦しんでいます。

逮捕者が出ると、弁護事務所各救対あるいは救援連絡センターは各警察署に問い合わせ、被逮捕者の留置番号をしらべます。留置番号さえわかれば、差し入れができるようになります。

闘争があり多量の逮捕者が出たことを知ったら、すぐ連絡センターに電話して下さい。あなたはずいぶんと忙しくなります。

差し入れる側の資格は、「救援会」で十分です。住所も、救援会代りの係官が交替し、親切（？）ても大切です。中にいる仲間をどれだけ勇気づけることでしょう。こうした救援活動ができるグループが、各地区にあったらどんなにすばらしいことでしょう。

3

「差し入れ」に対して警察は、さまざまな妨害や意地悪をします。初めて行った人の成功率はとても低いものです。

そこで、ここに、始めてでも、絶対に「差し入れ」を成功させるための一〇カ条を記してみました。

第一条　差し入れを断われるどのような理由もないことを確信せよ。

留置されている人の「留置番号」を知っていること、これだけが、差し入れのために必要な唯一の条件です。書物を除いて、どんな品物でも差し入れできます。また、午前九時から午後九時までなら絶対に受付けます。（夜間、土曜日の午後、日曜日には、いろいろと難くせをつけるので、なれないうちは避けた方がよいと思います）

第二条　係官に対し、シタ手に出たりして、キゲンをとろうとするな。散々待つ必要もない。

第三条　係官に対し、公務のひとつの業務として、公平にやるよう冷静に、かつ厳しく要求せよ。会計なおしゃべりなどする必要なし。

「差し入れ簿をもってきて下さい」など、どんどん事務的にテキパキ仕事を進めるよう要求すること。

第四条　刑事は必ず「中の奴は腹がいっぱいで、こんなに食べられないよ」とか、「今、友人が来て、沢山おいていったから、もう入れられない」などというものである。全部、ウソだと思え。「戦そうと、捨てようと、中の人の勝手だから、とにかく置いて行く」と頑張ること。

第五条　不当に制限を加えてきたら、法律を見せろと要求すること。

第六条　それでも駄目だったらその場で「弁護士に電話するから電話を貸してくれ」とたのむこと。効果はテキメンである。必ずの係官が交替し、親切（？）の住所で結構です。

第七条　どんなときでも、被逮捕者の名前をかいてはいけない。必ず留置番号でかく。氏名を知っているときも、必らず留置番号を調べて行くこと。中の人は、厳秘で頑張っているのに、差し入れにいった人の口から身元が割れることが、しばしばあるので特に注意すること。

第八条　自分の住所をかきたくないときは救援連絡センターなどの住所をかけばよい。

第九条　複数の人に差し入れするとき、差し入れ簿には、一人一人別にかいた方がよい。警察側に裁量の余地を残すようなことは避けよ。（獄中の同志を苦しめる材料に使われる可能性あり）

第十条　救援会として行くときは、一切、セクトによる差別はせず、一留置場にいる仲間全体に一様に差し入れることにしたいものである。

さいごに。

本当に大変な現状です。あなたの決断が望まれています。とにかく一度試みて下さい！。

（「合同救援ニュース」第三号）

中国五・四運動50周年記念・安保粉砕・日中友好

労学市民連帯大阪集会

五月十九日（月）午後五時

大阪中之島公会堂大ホール

記録映画　「夜明けの国」

「中国共産党九全大会」

講演　京大教授　井上　清

「中国の五・四運動と日本の青年学生運動」

主催　日中友好（正統）大阪府本部

職場からの通信

反合のなかで4・28 徹底した討論で仕事が停滞

ことしの四・二八沖縄闘争は労働組合にもかつてない高揚がみられた。次は反合・貫闘のなかで、官憲の弾圧や代々木の妨害と闘いながらこの闘争をとりくんだ、労働組合と反戦青年委員会の活動家の報告である。

四・二八沖縄闘争は、春闘のストライキが二波、三波と連続的にうち闘われる中でむかえた。

電通においても、沖縄奪還のためのストライキを実施できなかったが、時間内における職場での「沖縄奪還」「佐藤労政粉砕」「B52撤去」のシュプレヒコールを展開し、夜は大手前公園からナンバまでのデモに青年層を中心とした根こそぎ最大限動員で参加した。

大手前への抗議集会に参加するための政治討論集会を、早朝、午後の時間内とあらゆる機会に開き「指令による動員」から問題意識を自覚した動員部隊としての準備が徹底して行なわれ、四月二十八日は、正に一日じゅう、職場は混乱状態が続いた。

では、このような職場の混乱状態が、賃上げ闘争の最中であるからとの理由だけで、おこされたのだろうか。

決してそう簡単なものではなく、もっと根深い、日本帝国主義の根底への抗議行動して力強く闘われたのである。

「賃上げは闘えるが政治闘争はどうも組織化がむずかしい」と考えがちであった労働組合においてなぜ沖縄闘争が戦闘的に闘われたのだろうか。電通における職場状況を若干分析してみる必要がある。

電通は昭和四十年に十数万名のストライキを闘い、その闘争参加者全員に対する大量不当処分がだされた。その処分に対して総抵抗のバルチザン闘争をゲリラ的に闘ったのであるが、当時の民同指導部は、六・二五協定なる五条件を処分の撤回と取引きをしたのである。

この六・二五協定、五条件なるものが、私たちの職場には依然として存在しており、その内容が、現在の日本帝国主義の労働運動の再編をより鮮明に体現しているのである。

「近代的労使関係」という名のもとに組合運動はすべて機関による交渉を中心に進められ、その結果は職場での不満を解決するどころか、逆に組織的には官僚化が強くなり、電々公社の第四次計画の本質を見抜くこともできず、部分的な改良に終始したのである。

このような資本の一翼をになう労働組合であるが故に、合理化からくる労働はきびしく、さらに目標管理による企業意識の強化が、組合員である係長、主任という職制を先頭に連日連夜強制されている。

だから私たちは、難かしい論理よりも、労働者の本能とでもいうべき仕事からの実感として、再編されつつある今日の資本の状況を受けとめている。

特に青年労働者は敏感にそのことを受取り、反発し、電々公社の果す役割、資本主義機構そのものの否定以外に、賃上げも反合闘争もないことを十分見抜いているのである。

にもかかわらず民同幹部たちはそのことがどうしても理解できずまた理解しようともせず、「沖縄は政治問題だからほどほどに」とサボることになる。

本質を見抜いた青年労働者は、体制に組み込まれた組合ではどうすることもできないことを悟り、沖縄奪還闘争を通して、今日の日本帝国主義の体制を打破しようと考えたのであり、そのことが、縮少される職場の権利を拡大できるとの観点から、四・二八闘争を位置づけ、闘ったのである。

四・二八闘争を前にして、「組合機関がストをやらぬのであれば少数であっても、われわれ闘える者だけでもストライキにはいろう」と職場反戦活動家を中心に真剣な討論をしたのである。

東大闘争をはじめとする学園闘争の続発、反戦青年委員会の拡大などの条件があったにしろ、私たちの沖縄闘争の考え方は、「沖縄は第二次世界大戦の防衛であったのに」との同情とか「日本国憲法が適用されていない」とかの差別問題から出発しているのではなく世界帝国主義の極東における戦略拠点として、また、その決定的な役割をもつ日本帝国主義を粉砕する闘いとして、その延長上に七〇年安保闘争を位置づけて闘ったのである。

この闘争を闘うなかで、日共の議会中心主義が大衆的に明らかになり、階級闘争の部隊からの遊離状況がクローズアップされてきている。

たとえば、御堂筋デモにおける行動―府警から許された範囲内での行動、その制限された行動を突破しようとする労働者を「規律をみだすな、お前たちはトロツキストか」「整然としたデモで市民に訴えよう」と体制内民主主義の枠から一歩もでようとしない日共の人たちをみて拍手を送るのは機動隊と私服刑事だけである。

さらに、四・二八沖縄闘争を闘う政治状況を把握できぬゆえに、労闘を闘う場合でも、一切の闘争の先頭に立とうとせず、処分をおそれ、実力集団交渉を回避しようと懸命の努力をする始末である。

要するに彼らは、保守的ノンポリに対してどれだけ、次期衆議員選挙において、一票を獲得できるかを考えるだけであり、大衆現合日和見主義を、春闘・沖縄闘争を通じて見事に暴露したのである。

組合員大衆の声として日共を称して「第二民社党」と呼ぶようになっている。

㊟　電通の六・二五協定とは、四〇年春闘において、四・二〇、四・二三において十五万数千名がストライキに立ちあがり、それへの処分として、公社は大量処分をだしてきた。その処分撤回闘争として、職場管理機能をマヒさすための闘いとして、組合はバルチザン闘争を長期にわたって行ない反撃した。その結果公社は取引き条件として次の五条件をだした。

① ストライキはやらない。
② バルチザン闘争（庁内デモ、ビラ貼り集団交渉）はしない。
③ 中央協約を上回る下部協約を整理する。
④ 可期手当を二％以内の人に一〇％の増減額の差別をつける。
⑤ 六〇才以上の定昇をストップする。

この条件を承認するかしないかが、全国大会で大激論になり、僅少差で認めることになり、それ以後、電電公社の再編は急速に強まっている。（全電通　小林）

4・28闘争を激励

タイAA人民連帯委

タイのアジア・アフリカ人民連帯日本委員会は、四月十六日アジア・アフリカ人民連帯日本委員会へ、沖縄奪還と解放のために闘っているアメリカ帝国主義に対する日本人民の正義の闘争を支持するメッセージをおくった。メッセージは全文次のとおり。

沖縄は第二次世界大戦以来、アメリカ帝国主義に占領され、アメリカ帝国主義の植民地になっています。あなたがたは四月二十八日を日本国民の"沖縄デー"と定め、長年にわたって、沖縄をアメリカ帝国主義の占領から、奪還と解放を要求してきました。この日はまた、日本国民が"日米安保条約"の廃棄のために闘う日でもあります。アメリカ帝国主義と日本反動派によって結ばれたこの条約は、アメリカ帝国主義が日本を永久に支配するための道具であります。

あなたがたの闘争は勝利から勝利へと前進しています。いまや沖縄奪還と解放の要求は、アメリカ帝国主義と日本反動派の支配から日本国民を解放する闘いのなかでわけることのできない部分となっています。同時にこの闘争はまたベトナム人民の救国闘争への支持であり、アラブ・パレスチナ人民への支持であり、タイ人民をふくめてアジア人民と全世界人民の解放闘争への支持であります。

現在、アメリカ帝国主義者は、日本反動派と共謀して、日本人民をあざむき、彼らの闘争を妨害し沖縄の占領を継続しようとして、小細工を弄んでいます。さらに重大なことは、ふたたびアジアを侵略するために、彼らはたがいに手をたずさえて、日本のファシスト軍国主義を復活させようとしています。彼らは特に世界革命の偉大な指導者毛沢東主席は、われわれに次のように教えています。「すべての反動派は同じである――もし君がそれを打たないならば、滅びはしない。これはちょうど床をはくようなものである。概してほうきがとどかないところから、ちりはなくならないものだ」アメリカ帝国主義と日本反動派は力づくで日本を支配しています。それ故日本人民は彼らに対して、報復の闘いをおこすほか道はありえません。

タイ共産党の指導の下に、愛国的なタイ人民は"鉄砲から政権が生れる"という毛沢東主席の普遍的真理を敢然と適用して、アメリカ帝国主義者をおいだし、タノム裏切り者一派を打倒するために、三年間にわたって武装闘争をおこなってきました。愛国的なタイ人民はひとつまたひとつと勝利し、タイ七十一県のうち三十三県に闘争地域が拡大し、タイ人民解放軍の力は発展しています。

タイの革命的、愛国的人民は、アメリカ帝国主義と日本反動派に反対する日本人民の闘争が、正義の闘争であると信じています。われわれは、あなたがたの闘争と勝利を自分自身のこととみなしています。われわれはきたるべき"沖縄デー"が日本人民の光栄ある輝かしい闘争のなかで、またひとつの勝利となることを願っています

（タイ愛国　戦線外国代表部発行「タイパトリオット」）

「日本復帰」を問おう

大阪　門真で沖縄闘争集会

四月二十三日夜門真市立文化会館で、全大阪地区反戦青年委員会門真地区協議会、電機労連社会主義研究会松下支部、門真青年の会が主催し、後援大阪電通大学反戦会議、反戦高協河北地区委員会で門真市民集会がひらかれた。

五十名の労働者、学生、市民が参加し、はじめに映画「三里塚の夏」をみたあと、門真反戦などから連帯のあいさつがあり、沖縄復帰協の宮里宏氏から現地報告がおこなわれ質疑討論があった。豊田市議、渡久地氏の「沖縄問題と自治体問題をいかに考えるか」との講演の後、大阪電気通信大学反戦会議、反戦高協からの連帯のあいさつがあり、四・二八闘争と六九春闘勝利を決議し、散会した。

渡久地氏の講演の要旨は次のとおり。

沖縄問題の提起は、自分が日本の国籍をえらぶということが、帝国主義日本の佐藤栄作の支配しているところへ帰るのかどうか、それとも国籍をいかにしてインターナショナルになるのかどうかという問題としての提起であり、どうして、チェコ国旗と国歌で闘っていたがチェコの人たちが、赤旗を立てインターをうたって闘ってほしかった。

沖縄人という言葉は、きげすみであり、あいまいな言葉である。人種をさすのか、地方なのか、それとも民族をさすのか。

ニューレフトは、民族と国家の問題を克服しなければならない。

自治体問題にふれると、自治体と大学は、向うさんの最もよわい環だ。むちゃくちゃはやれないという点で共通している。

大学は自治ということを看板にし、いまの資本主義体制を維持する一方の支えだ。

自治体もまた、市民福祉をたてまえにし、民間企業ではできないことをやって、支配体制を維持している。

国は、国防と教育を主ににない県は、国防と教育と住民福祉を半半になり、市は住民福祉を中心にして、国家権力と支配体制を支えている。

たとえば、市の市民課は、法務局の委託をやっている。

だから自治体とは国家とその権力、支配体制を維持強化する中枢神経である。

門真市は、松下独占に奉仕する市であるが、豊田市はそれ以上にトヨタ独占に奉仕し、企業が、自治体をスッポリのみこみ、自治体が企業に奉仕をしている。

だから、一つの問題を徹底的に闘うことである。その行く先は、かならず、支配体制とぶつかる。

剣な討論をしたのである。

東大闘争をはじめとする学園闘争の続発、反戦青年委員会の拡大などの条件があったにしろ、私たちの沖縄闘争の考え方は、「沖縄は第二次世界大戦の防衛であったのに」との同情とか「日本国憲法が適用されていない」とかの差別問題から出発しているのではなく世界帝国主義の極東における戦略拠点として、また、その決定的な役割をもつ日本帝国主義を粉砕する闘いとして、その延長上に七〇年安保闘争を位置づけて闘ったのである。

この闘争を闘うなかで、日共の議会中心主義が大衆的に明らかになり、階級闘争の部隊からの遊離状況がクローズアップされてきている。

たとえば、御堂筋デモにおける行動―府警から許された範囲内での行動、その制限された行動を突破しようとする労働者を「規律をみだすな、お前たちはトロツキストか」「整然としたデモで市民に訴えよう」と体制内民主主義の枠から一歩もでようとしない日共の人たちをみて拍手を送るのは機動隊と私服刑事だけである。

さらに、四・二八沖縄闘争を闘う政治状況を把握できぬゆえに、労闘を闘う場合でも、一切の闘争の先頭に立とうとせず、処分をおそれ、実力集団交渉を回避しようと懸命の努力をする始末である。

要するに彼らは、保守的ノンポリに対してどれだけ、次期衆議員選挙において、一票を獲得できるかを考えるだけであり、大衆現合日和見主義を、春闘・沖縄闘争を通じて見事に暴露したのである。

組合員大衆の声として日共を称して「第二民社党」と呼ぶようになっている。

㊟　電通の六・二五協定とは、四〇年春闘において、四・二〇、四・二三において十五万数千名がストライキに立ちあがり、それへの処分として、公社は大量処分をだしてきた。その処分撤回闘争として、職場管理機能をマヒさすための闘いとして、組合はバルチザン闘争を長期にわたって行ない反撃した。その結果公社は取引き条件として次の五条件をだした。

① ストライキはやらない。
② バルチザン闘争（庁内デモ、ビラ貼り集団交渉）はしない。
③ 中央協約を上回る下部協約を整理する。
④ 可期手当を二％以内の人に一〇％の増減額の差別をつける。
⑤ 六〇才以上の定昇をストップする。

この条件を承認するかしないかが、全国大会で大激論になり、僅少差で認めることになり、それ以後、電電公社の再編は急速に強まっている。（全電通　小林）

大阪市大　道路一杯のデモ

代々木の統制に激しい反発

全共闘の無期限バリケードストがつづく大阪市立大学の教職員組合は、執行部を日共代々木派がにぎり、学生の闘争に敵対している。このようななかで、一部の教職員は学生の行動に連帯した運動をつくりだそうと、活動をつづけている。次はこれらの教職員のグループからの報告である。

大阪市立大学教職員組合は、組合員約十八百名。組合幟いの書記六名（一名以外は代々木党員、民青）専従組合本部書記長一名（代々木党員）四支部書記長もほとんどが代々木党員、民青系でしめられている現状である。

四・二八の沖縄闘争は大阪では代々木系の分裂集会が行なわれたが、総評系に属する市大組合では四・二八のとり組みがまったく行なわれなかった。代々木系の組合役員は"四・二八は扇町であるらしい"（当日扇町では何もない）と組合員の質問に答え、メーデーのマンガの書き方、ポスター書き方、メーデーの歌の練習と入集めをやり四・二八をボイコットしようとしていた。たまりかねた教職員組合員有志は、沖縄無条件全面返還大手前集会参加のアッピールを学内に掲示した。ほっておけず組合からは二割動員指令を流してきた。

市大の組合では、上部の指令が流されなかったことは、一度や二度ではない。四・二八大手前には組合が今まで一番弱いといっていた理学部からプラカード、ノボリをつくり助手層が多数自主参加した。府庁前、完全武装の機動隊がずらりとならぶ前で、組合役員は、"学生をわり込ませないよう"、"四列にならんで歩くよう"指示した。やがてデモ"沖縄を返せ""安保粉砕""佐藤政府打倒"のシュプレヒコール、民青が沖縄の歌を歌いはじめる。一方歌を歌ってだらだら歩きでは気勢が上らないと、いきおいよくシュプレヒコールが繰返えされる。

助手会から"もっと広がれ"の声、代々木の書記、民青が"ひっ込んで""組合の統制に従え"というまなしに"三千六列になれ"のかけ声があがる。助手会を中心に道路いっぱいに広がった。両方も後方の市職も道路いっぱいに行進していた。市大の一部分だけがくぼみのように引込んでいた。もう早、代々木、民青がいくら官僚的統制を加えても無効である。"組合の統制にしたがえ"というが、組合はわれわれ組合員の意見で動くものだ。上からの統制は組合本来の姿でない""うちの組合がこんなに右翼だとは思わなかった""あの連中は何のために今日のデモに来たのだ""まるでポリ公と一緒だ"われわれは、御堂筋いっぱいにフランスデモを行なった。

交差点には武装機動隊が楯をもってズラリとならんでいた。むらむらとにくしみがこみ上げてくる。"ポリ公帰れ"のシュプレヒコール。社会、職場でのいっさいの不満が"沖縄全面返還""安保粉砕""佐藤政府打倒""ポリ公帰れ"の一言一言にこめられていた。

市大教職組初まって以来の政治デモへの多数の自主参加、はからずも代々木が一番弱いといっていた理学部から多数参加した。

御用組合体制の中に大きなあぐらをかき闘わない、いや権力の別動隊である代々木、民青。

彼らは、あらゆる手段をもってさらに必死に既得権の壁にしがみつこうとするだろう。われわれは代々木、民青の労働者階級への裏切りの正体をバクロし、徹底して権力と同様彼らも打ち砕かねばならない。四・二八闘争はわが市大におけるその第一歩である。

心斎橋筋を二百のデモ

二十八日には東京へ行こうと話し合いながら、仕事の都合（多分に日和った）で行けなかったのが残念だった。しかし、十人近い同志が、二十六日京都のデモの後で上京。ぼくとしても、御堂筋でがんばらなければ申しわけない。

四・二八の当日、朝からソワソワして仕事がはかどらない。一線級がぬけてしまった御堂筋闘争のイメージを必死になって頭にえがくが、どうもよくない。敗北のイメージばかり。

午後六時、大阪城公園に行く。いるはいるは人の波。ヘルメット部隊も多い。学園闘争でしばらく無沙汰していた学生部隊が大量にいるのは、なんとしても心強かった。反戦の隊列も、これまでになくふくれあがっているし、各労組の先頭には、反戦のヘルメットをかぶった労働者がかなりいるから、反戦メンバーの参加は、二千人近くになっている。

いよいよデモ。会場を出た所で道いっぱいにジグザグをしたのはよかったが、あとは完全にマークされ、動きがとれない。

やはり先輩たちは勇敢なんだなと、自分のことはたなにあげて東京へ行ったメンバーをたたえる。

大阪球場前で解散のあと、千日前に集まり、第二の集会を開催。再度百人ほどで、スバル座から心斎橋をカケ足デモでかけぬける。

商店街の人たちのなかからも拍手がおこる。デモを終えた労組の労働者も参加してくる。大丸近くにきた時は、二百人をこすデモ隊になっていた。しかし、機動隊が全然おっかけてこないので、気の抜けたビールみたいな感じだった。（西大阪反戦　魚住）